TICADⅦ 公式サイドイベント

参加費
無料

セミナー
気候変動と家族農業

アフリカの農民の声を聴こう

家族農業

気候変動

と　き：2019年8月28日（水）
18:00～19:30（17:40開場）

ところ：パシフィコ横浜１F
TICAD展示ホールB4（みなとみらい駅から徒歩５分）

気候変動 どうしたらいいの？
伝統と自然を生かした家族農業がカギ！？

この3月に巨大サイクロンがアフリカ南東部を直撃、これまで見られなかった場所で起きたことから、気候変動が要因と言われました。先進国の責任が重い気候変動ですが、その被害を受けるのは、多くの場合、自然を保全・利用しながら暮らす人びとです。たとえばアフリカの農民たちもこれに当てはまります。
このたびTICADを機にモザンビークとカメルーンから農民リーダーが来日します。化学肥料を大量に使う農業に対し、アフリカの農民によって行われる自然を保全・利用しながらの農業は気候変動を抑えるとも言われています。本セミナーでは、気候変動と農業をめぐる現状について専門家が解説しながら、アフリカの農民リーダーたちの声を聞き、アフリカの家族農業が果たす役割や、私たちの暮らしと支援のあり方などについて議論したいと思います。皆さま、ふるってご参加ください。

*主　催：*アーユス仏教国際協力ネットワーク
*共　催：*アフリカ日本協議会（AJF）、日本国際ボランティアセンター（JVC）
GRAIN
*協　力：*モザンビーク開発を考える市民の会
*助　成：*庭野平和財団、大竹財団

TICADⅦ公式サイドイベント　アフリカの農民の声を聴こう
2019年８月28日(水)＠パシフィコ横浜

予定プログラム　（敬称略）

・報告：アフリカの農民リーダー代表（2名）、市民社会メンバー1名（逐次通訳あり）
・解説：村上真平／家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン（国連「家族農業の10年」の推進母体）代表
・質疑応答：モデレーター　林　達雄／アフリカ日本協議会 顧問
・司会／開催趣旨：渡辺直子／日本国際ボランティアセンター

参加申込み： 以下のサイトから事前にお申込み下さい。
https://ssl.form-mailer.jp/fms/d2c34f99628546

お問合せ： Tel：03-3820-5831／E-mail：event@ngo-ayus.jp（担当：アーユス仏教国際協力ネットワーク）
Facebookページ　https://www.facebook.com/events/2365778436823721/

登壇者プロフィール

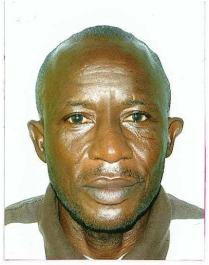
■コスタ・エステバオ（Costa Estevao）

モザンビーク出身。ナンプーラ州農民連合（UPC-N）代表。小農として、コメ、トウモロコシ、ピーナッツ、豆類、カシューナッツ、さまざまな野菜の有機栽培に取り組む。カトリック教会のメンバーとして活躍する中で、小農運動（UNAC／モザンビーク全国農民連合）と出会い、小農の権利を小農自身が連帯しながら守っていく運動に感銘を受ける。UNACの支部がなかった2010年、ナンプーラ州での組織づくりに着手し、2014年についに「州連合」を結成。同年、同州でのUNACの全国総会開催を実現する。土地収奪が激しい同州の小農運動の代表として仲間達のため奮闘してきた。設立から5年後の現在、UPC-Nのメンバーは3万人に届く勢い。2014年より、日本の市民社会との共同農村調査を行っている。4度目の来日。TBS報道特集、News23でも活動が取り上げられた。

■ボアベンチューラ・モンジャーネ（Boaventura Monjane）

モザンビーク出身。子どもの頃から母親の畑を手伝って育つ。ジャーナリズムを志し、苦労をしながら大学を出て、世界最大の小農運動であるビア・カンペシーナ国際局やモザンビーク農民連合で広報を担当。しかし、農民が直面する課題をより世界規模で構造的に捉える必要があると考え、大学院に進み、現在ポルトガルやオランダの研究所に所属しながら博士論文を執筆中。目指すはJournalist-Activist-Scholar（ジャーナリストであり、アクティビストであり、学者）。誰にも優しく公平かつシャープなモザンビークの若者。

■エマニュエル・エロング（Emmanuel Elong）



カメルーン出身。リトラル州ムボンジョ村で生まれる。カメルーンに進出するアグリビジネスや多国籍企業による土地収奪や大規模な環境汚染に対抗する農民、活動家として知られる。2010年から、ベルギー人とフランス人が経営するSOFCIN/Bollorｅ社のプランテーション（油ヤシ、ゴム）の影響を受けるコミュニティの人びとの権利を守るための、人びとによるネットワークSynaparcamを組織し、代表を務める。

■村上 真平 （むらかみ しんぺい）

家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン代表、愛農会代表
1959年福島県生まれ。82年インド滞在をきっかけに海外協力の道へ。85年から12年間、NGOを通してバングラデシュ、タイにて自然農業の普及と持続可能な農村開発の活動に関わる。2002年日本に帰国し、福島県飯館村に入植、「自然を収奪しない、第三世界の人々を搾取しない生き方を目指し、自然農業、自給自足をベースにしたエコビレッジづくりを始める。2011年福島原発事故により三重県美杉町に避難、「自然農業と持続可能な生き方」の実践及び、学びの場としての自然農園「なな色の空」を再開する。AFA(Asian Farmers Association) のもと議長「農業分野における気候変動」の第一人者として国際的に活動している。

■林 達雄（はやし たつお）

アフリカ日本協議会特別顧問、アーユス仏教国際協力ネットワーク専門委員
1954年横浜市生まれ。愛媛大学医学部卒。国境なき医師団の影響を受け、1983年よりNGOの職員としてタイ・エチオピアで救援活動。干ばつ、砂漠化、森林破壊、などの環境問題が飢餓を招くことを目のあたりにして、環境問題の重要性に目覚める。1992年リオデジャネイロでの地球サミットに参加。その後、アフリカエイズ問題に携わる。日本国際ボランティアセンター元代表。アフリカ日本協議会前代表。

■渡辺 直子（わたなべ なおこ）

日本国際ボランティアセンター南アフリカ事業担当／地域開発グループマネージャー。2013年から、日本がブラジルとともにモザンビークで進めるODA農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題に関連して、モザンビーク小農組織との合同調査を開始、現在までに10回以上の現地調査を行う。国際NGO・GRAIN事業の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでの土地収奪問題にもかかわる。

TICAD7公式サイドイベント

SDGsとアフリカ開発？
～私たちの暮らしから考える～

アフリカは「遠い国？」
私たちの身近なものがアフリカから
来ているのを知っていますか？

エチオピアのコーヒー、モーリタニアのタコ、ケニアのバラ。そして日本の産業になくてはならないニッケルやプラチナなどの鉱物資源……これらはすべてアフリカから輸入されているものです。
ではこれらの輸入は、アフリカの人たちの暮らしも豊かにしているのでしょうか？
TICAD7を機に、アフリカ から農民の方たちをお招きし、私たちに身近な存在であるパームオイルと大豆油を事例に、今世界で、アフリカで何が起きているのか、専門家を交えて報告してもらい、日本との関係を紐解きます。そしてSDGs達成に向けて日本の消費者として何ができるか、みなさまと横浜から考えます。奮ってご参加ください。

日時：2019年8月29日(木)
15:30～17:00
会場：パシフィコ横浜1階
展示ホールB

※みなとみらい線・みなとみらい駅より徒歩5分
定員：200名※会場はペットボトルの持ち込みが禁止ですので、水筒等をご持参ください。

報告1：パームオイルと私たち
浜田順子（WE21ジャパン理事）
報告２：油ヤシ・プランテーションで起きていること
エマニュエル・エロング（カメルーン農民）
報告３：アフリカで大豆生産？
～日本のODAプロサバンナ事業から見えること
ボア・モンジャーネ（モザンビーク活動家）
コスタ・エステバオ（モザンビーク農民）
解説：グローバルフードシステムと日本
平賀みどり
～フリーディスカッション～
＜コメント・ご挨拶＞
海田祐子（WE21ジャパン理事長）
＜司会・全体進行＞
渡辺直子（日本国際ボランティアセンター(JVC)）

お申込み・お問合せ

こちらのサイトからお申し込みください。
https://ssl.form-mailer.jp/fms/b00f23a2628543

【お問合せ】WE２１ジャパン
Tel：045-264-9390
Email:shien@we21japan.org

主催：認定NPO法人WE21ジャパン　共催：GRAIN
協力：モザンビーク開発を考える市民の会
助成：地球環境基金(油ヤシ・プランテーション産業拡大に対応するためのコミュニティ能力強化と地域プラットフォームの形成),(公益財団法人)庭野平和財団,(一般財団法人)大竹財団

報告者紹介

■エマニュエル・エロング（Emmanuel Elong）
カメルーン出身。リトラル州ムボンジョ村で産まれる。カメルーンに進出するアグリビジネスや多国籍企業による土地収奪や大規模な環境汚染に対抗する農民、活動家として知られる。2010年から、ベルギー人とフランス人が経営するSOFCIN/Bolloré社のプランテーション（油ヤシ、ゴム）の影響を受けるコミュニティの人びとの権利を守るための、人びとによるネットワークSynaparcamを組織し、代表を務める。

■コスタ・エステバオン（Costa Estevao）
モザンビーク出身。ナンプーラ州農民連合（UPC-N）代表。小農として、コメ、トウモロコシ、ピーナッツ、豆類、カシューナッツ、さまざまな野菜の有機栽培に取り組む。カトリック教会のメンバーとして活躍する中で、小農運動（UNAC／モザンビーク全国農民連合）と出会い、小農の権利を小農自身が連帯しながら守っていく運動に感銘を受ける。UNACの支部がなかった2010年、ナンプーラ州での組織づくりに着手し、2014年についに「州連合」を結成。同年、同州でのUNACの全国総会開催を実現する。土地収奪が激しい同州の小農運動の代表として仲間達のため奮闘してきた。設立から5年後の現在、UPC-Nのメンバーは3万人に届く勢い。2014年より、日本の市民社会との共同農村調査を行っている。四度目の来日。TBS報道特集、News23でも活動が取り上げられた。

■ボアベンチューラ・モンジャーネ（Boaventura Monjane）
モザンビーク出身。子どもの頃から母親の畑を手伝って育つ。ジャーナリストを志し、苦労をしながら大学を出て、世界最大の小農運動であるビア・カンペシーナ国際局やモザンビーク農民連合で広報を担当。しかし、農民が直面する課題をより世界規模で構造的に捉える必要があると考え、大学院に進み、現在ポルトガルやオランダの研究所に所属しながら博士論文を執筆中。目指すはJournalist-Activist-Scholar（ジャーナリストであり、アクティビストであり、学者）。誰にも優しく公平かつシャープなモザンビークの若者。

■平賀緑（ひらが みどり）
広島出身。国際基督教大学卒業後、香港中文大学へ留学。香港と日本において新聞社、金融機関、有機農業関連企業などに勤めながら、1997年からは手づくり企画「ジャーニー・トゥ・フォーエバー」共同代表として、食料・環境・開発問題に取り組む市民活動を企画運営した。2011年に大学院へ移り、ロンドン市立大学修士（食料栄養政策）、京都大学博士（経済学）を取得。植物油を中心に食料システムを政治経済学的アプローチから研究している。新刊『植物油の政治経済学--大豆と油から考える資本主義的食料システム』2019年、昭和堂。

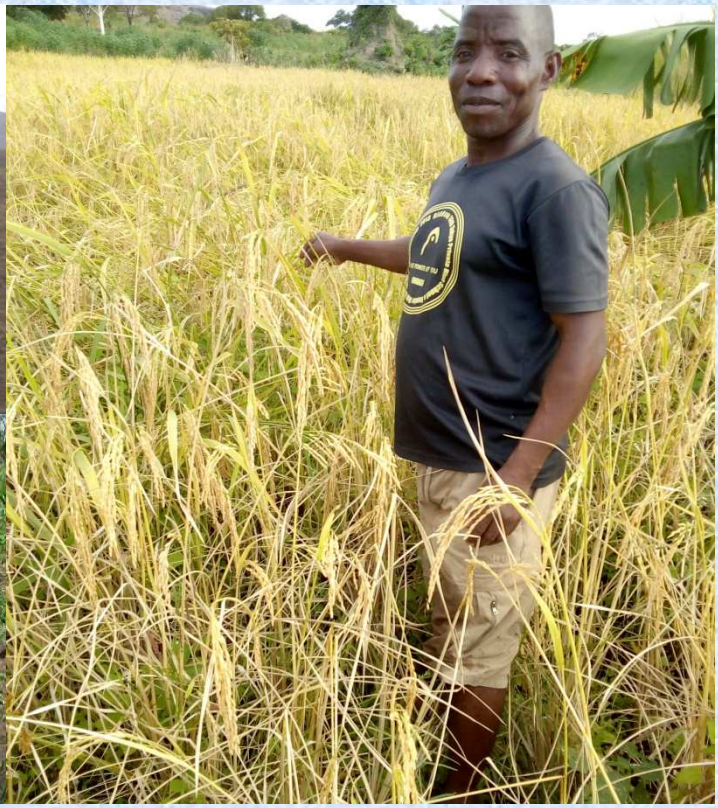
■渡辺直子（わたなべ　なおこ）
日本国際ボランティアセンター南アフリカ事業担当／地域開発グループマネージャー。201２年から、日本がブラジルとともにモザンビークで進めるODA農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題の現地調査に従事。国際NGO・GRAIN事業の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでの土地収奪問題にもかかわる。

WE21ジャパンについて
WE21ジャパンでは、物品寄付とボランティア参加で運営するチャリティショップ「WEショップ」を拠点にしてリユース・リサイクルを進めながら、アジアを中心とした世界約30カ国の人びととの民際協力を行っています。また環境・貧困・人権などさまざまな問題について伝え、学ぶ共育活動を行なっています。現在、神奈川県全域で37の地域NPOが53店舗のWEショップを運営し、全体調整役としてのWE21ジャパンを含め、38のNPOが連携して、これらの活動を進めています。

2019年8月31日（土）13:30～15:30＠キャンパスプラザ京都

今、アフリカで起きていること

～私たちの食や暮らし、税金から考える～



アフリカは京都から遠い？
実は、日本の私たちの食のあり方や暮らし、日々納めている税金が、アフリカの小農に大きな影響を及ぼしています。
その一方で、アフリカの小農は世界を変えつつあります。
アフリカ・モザンビークから小農運動のリーダーや世界の小農運動（ビア・カンペシーナ）の関係者、日本のNGOをお招きし、今アフリカや世界で起きていることをお話いただくとともに、京都の有機農家との座談会も企画しました。
ぜひふるってご参加下さい。

※当日のプログラムは裏面をご参照ください。

会場：キャンパスプラザ京都
※京都駅（烏丸中央口）徒歩5分
https://binged.it/2z4X9Or
京都市下京区西洞院通塩小路下る
参加費：500円以上のカンパ制
当日参加可能

予約・お問合せ

＊ご予約・お問い合わせはフェイスブック経由でお願いします。

京都ファーマーズマーケット（井崎）
https://www.facebook.com/events/725712077881735/

＜当日のプログラム＞

【報告1】アフリカ小農x日本NGO

「なぜモザンビーク小農は日本の援助に抗うの？」

コスタ・エステバン（ナンプーラ州農民連合）x 渡辺直子（日本国際ボランティアセンター）

【報告2】世界の小農運動とオルタナティブの動き

「国連を変えた（小農の権利宣言採択）小農の繋がりとアグロエコロジー」

ボア・モンジャーネ（元ビアカンペシーナ国際局、モザンビーク市民社会）

【座談会】日本の小農xアフリカの小農

松平尚也（耕し歌ふぁーむ/小農学会/京都大学大学院）

～フリーディスカッション＆交流～

＜司会・全体進行＞

井関敦子（京都ファーマーズマーケット）/小林舞（総合地球科学研究所FEASTプロジェクト）

報告者紹介

■コスタ・エステバン（Costa Estevao）

モザンビーク出身。ナンプーラ州農民連合（UPC-N）代表。小農として、コメ、トウモロコシ、ピーナッツ、豆類、カシューナッツ、さまざまな野菜の有機栽培に取り組む。カトリック教会のメンバーとして活躍する中で、小農運動（UNAC／モザンビーク全国農民連合）と出会い、小農の権利を小農自身が連帯しながら守っていく運動に感銘を受ける。UNACの支部がなかった2010年、ナンプーラ州での組織づくりに着手し、2014年についに「州連合」を結成。同年、同州でのUNACの全国総会開催を実現する。土地収奪が激しい同州の小農運動の代表として仲間達のため奮闘してきた。設立から5年後の現在、UPC-Nのメンバーは3万人に届く勢い。2014年より、日本の市民社会との共同農村調査を行っている。四度目の来日。TBS報道特集、News23でも活動が取り上げられた。

■渡辺直子（わたなべ　なおこ）

日本国際ボランティアセンター南アフリカ事業担当／地域開発グループマネージャー。2012年から、日本がブラジルとともにモザンビークで進めるODA農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題の現地調査に従事。国際NGO・GRAIN事業の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでの土地収奪問題にもかかわる。

■ボアヴェントゥーラ・モンジャーネ（Boaventura Monjane）

モザンビーク出身。子どもの頃から母親の畑を手伝って育つ。ジャーナリストを志し、苦労をしながら大学を出て、世界最大の小農運動であるビア・カンペシーナ国際局やモザンビーク農民連合で広報を担当。しかし、農民が直面する課題をより世界規模で構造的に捉える必要があると考え、大学院に進み、現在ポルトガルやオランダの研究所に所属しながら博士論文を執筆中。目指すはJournalist-Activist-Scholar（ジャーナリストであり、アクティビストであり、学者）。誰にも優しく公平かつシャープなモザンビークの若者。

■松平尚也（AMネット/耕し歌ふぁーむ/小農学会/京都大学大学院）

1995年にAMネット立ち上げに関わり、現在代表理事。 WTO等の会議に参加しグローバルな農の問題に関わりつつ2010年に就農。 耕し歌ふぁーむを設立。伝統野菜等の宅配事業の傍ら京都大学農学研究科で小規模農業について農家の視点から研究している。

【9月4日（水）15:30～18:30 院内集会@参議院議員会館 ご案内】

国連「小農権利宣言」「家族農業10年」を受けて考える日本の開発援助とアフリカ小農～モザンビーク、プロサバンナの事例から

世界で小農や家族農業への注目が高まっています。昨年末に国連総会で「小農と農村で働く人びとの権利に関する国連宣言（小農宣言）」が採択され、今年5月からは「国連家族農業の10年」が始まりました。小農・農家が主体的にその営みを継続させられるよう、これを守り促進していくための取り組みが国際約束となりました。この国際的な潮流には、家族で営む小さな農業の役割の再評価と期待が込められています。

このことは、海外で行われる日本の農業分野への援助や投資にも影響を及ぼします。
アフリカ・モザンビーク北部（ナカラ回廊地域）における日本の援助（ODA）事業「プロサバンナ」に、現地の小農運動組織UNAC（モザンビーク全国農民連合）が反対を表明してから7年が経ちます。

この間、モザンビークの市民社会は、同事業の「大規模農業開発」という方向性のみならず、その不透明性や人権侵害、市民社会への介入・分断などについて反対と要請を続けてきました。しかし、状況が変わらぬまま、現在までに30億円以上の日本の税金が費やされています。昨年には、同事業がモザンビークの人びとの「知る権利を侵害」、「事業にかかる情報の全面開示」との判決が現地の裁判所で確定しました。

今回来日する小農運動リーダーが所属するUNACは、小農宣言等の成立に多大な役割を果たした国際的小農運動ビア・カンペシーナの構成団体です。これまでUNACは、地球環境・地域社会、そして人びとの食を支える小農を尊重し、ボトムアップで政策や協力が創造されるべきだと主張してきました。

世界的にもアフリカの小農からも、日本の開発援助や投資のあり方の転換が求められている今、日本の援助関係者・機関、企業、そしてNGOや市民はどう変わっていくべきか。小農運動リーダーとビア・カンペシーナ国際局の元スタッフをお迎えし、活発に議論したいと思います。ぜひ、ご参加下さい。

2019.9.4(水) 15:30-18:30（開場15:00）

【会場】参議院議員会館　会議室 101　※永田町駅から徒歩1分、国会議事堂前駅から徒歩4分
https://bb-building.net/tokyo/deta/457.html

【集合時間】15:00-15:20（議員会館1階ロビー）会議室には入館証が必要です。ご留意下さい。

・玄関入って右手の手荷物チェックを受けてから、左手のロビーにお越し下さい。
・遅れる方は到着時間を事前に申込みサイトの「備考欄」に記入の上、ロビーにてスタッフをお待ち下さい。

【お申込み】９月４日（水）正午まで
下記サイトにご登録の上、議員会館までお越し下さい。
https://ssl.form-mailer.jp/fms/cc3ed7cf633390

【お問合せ】ticad-farmersinafrica@tutanota.com／電話：03-3834-2388（渡辺）

【資料代】一般1000円、学生500円　【定員】100名

当日のプログラム

【1】背景「これまでのプロサバンナ事業をめぐる経緯」：
渡辺直子（日本国際ボランティアセンター）
【2】現状報告「現地で何が起きているのか」：
コスタ・エステバオン（ナンプーラ州農民連合代表）
【3】現状報告「モザンビーク社会で何が起きているのか」：
ボアヴェントゥーラ・モンジャーネ（ﾌﾟﾛｻﾊﾞﾝﾅにﾉｰ！ｷｬﾝﾍﾟｰﾝ）
【4】政府代表との公開ディスカッション：
外務省国際協力局国別第三課、JICA農村開発部・アフリカ部、
モザンビークゲスト、池上甲一、渡辺直子
【5】現状報告「ディスカッションを踏まえた世界潮流報告」：
池上甲一（近畿大学名誉教授）
【6】オープンディスカッション

■コスタ・エステバン（Costa Estevao）
モザンビーク出身。ナンプーラ州農民連合（UPC-N）代表。小農として、コメ、トウモロコシ、ピーナッツ、豆類、カシューナッツ、さまざまな野菜の有機栽培に取り組む。カトリック教会のメンバーとして活躍する中で、小農運動（UNAC／モザンビーク全国農民連合）と出会い、小農の権利を小農自身が連帯しながら守っていく運動に感銘を受ける。UNACの支部がなかった2010年、ナンプーラ州での組織づくりに着手し、2014年についに「州連合」を結成。同年、同州でのUNACの全国総会開催を実現する。土地収奪が激しい同州の小農運動の代表として仲間達のため奮闘してきた。設立から5年後の現在、UPC-Nのメンバーは3万人に届く勢い。2014年より、日本の市民社会との共同農村調査を行っている。四度目の来日。TBS報道特集、News23でも活動が取り上げられた。

■ボアヴェントゥーラ・モンジャーネ（Boaventura Monjane）
モザンビーク出身。子どもの頃から母親の畑を手伝って育つ。ジャーナリストを志し、苦労をしながら大学を出て、世界最大の小農運動であるビア・カンペシーナ国際局やモザンビーク農民連合で広報を担当。しかし、農民が直面する課題をより世界規模で構造的に捉える必要があると考え、大学院に進み、現在ポルトガルやオランダの研究所に所属しながら博士論文を執筆中。目指すはJournalist-Activist-Scholar（ジャーナリストであり、アクティビストであり、学者）。誰にも優しく公平かつシャープなモザンビークの若者。

■池上甲一（いけがみ　こういち）
近畿大学名誉教授。農業社会経済学の構築を目指し、農業・食料、水・環境、フェアトレード、大規模農業投資などについて研究しながら、日本、アフリカ、タイの村を歩き回っている。著書に『食の共同体』（編著、ナカニシヤ出版，2008年）、『食と農のいま』（編著、ナカニシヤ出版、2011年）、『農の福祉力』（単著、農山漁村文化協会、2013年）など。現在、国際農村社会学会会長。

■渡辺直子（わたなべ　なおこ）
日本国際ボランティアセンター南アフリカ事業担当／地域開発グループマネージャー。2012年から、日本がブラジルとともにモザンビークで進めるODA農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題の現地調査に従事。国際NGO・GRAIN事業の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでの土地収奪問題にもかかわる。

【主催】 日本国際ボランティアセンター(JVC)、アフリカ日本協議会(AJF)、ATTAC Japan、No! to landgrab, Japan、モザンビーク開発を考える市民の会
【助成】 庭野平和財団、大竹財団